

『スッタニパータ』は南アジアに古くから伝わるお経で、お釈迦様の肉声を伝えていると考えられているものです。その中に次のような話があります。

田を耕すバラモンつまり修行者が登場します。名前はバーラドヴァージャといい、大きく農業を営んでいたようです。そして、自ら収穫した食べ物を人々に分配していました。

ある朝、お釈迦様は、バーラドヴァージャのかたわらに、<sup>たくはつ</sup>托鉢で食物を得るために立っていました。

お釈迦様の姿を見て、彼は次のように言いました。

「修行者よ、私たちは自分で田畑を耕し、種をまき、そうやって食料を得ているのだ。あなたも、自分で田畑を耕し、種をまき、食べ物を得れば良いのだ」

お釈迦様はその言葉に対し、このように答えました。

「バラモンよ、私もまた、耕し、種をまく。耕し種をまき、しかる後に食するのだ」

バーラドヴァージャは首をかしげました。

「そう言うが、いまだかつて、あなたの耕す姿を見たことがない。あなたの<sup>すき</sup>鋤はどこにあるのか。あなたの牛はどこにいるのか」

そう問われた時、お釈迦様は次のように答えました。

「私にとって、信仰は私のまく種である。修行は土を潤す雨である、<sup>ちえ</sup>智慧は私の<sup>すき</sup>耕す鋤である。身をつつしみ、ことばをつつしみ、食べ過ぎず、真実をまもることが、私の田畑における草取りである。努力は私の牛であり、やすらぎの境地に私を運んでくれる。退くことなく進み、やすらぎにいたったならば、悲しむことがない。このように私は耕し、この上なく甘い実りを収穫するのである」

この話は、額に汗し働くことを否定しているものではありません。私たちは日々の糧を得なければ生きてはいけません。そうではなく、お釈迦様が語ったこの言葉は、心の営みの重要性を示しているのです。

## 『 禅のこころ -曹洞宗- 』

---

「日々どのような心持ちで暮らしているのか」「よく生きるとはどういうことなのか」「限りあるいのちをどう生きていけばいいのか」といったことを、目に見えないからといって、私たちはやりすごしてしまっていないでしょうか。

今の社会は目に見えるものに重きを置きすぎているのではないかと思います。確かに物質的なものは必要です。しかし、それと同じくらい、いやそれ以上に、目に見えない心の営みを大切にしなければならないのです。

私たちもこうつぶやきましょう、  
「私も、心の田畑を耕す者なのだ・・・」と。

— 終 —